

## 自他の生命尊重を基盤とした安全に関する資質・能力の育成 —「学校安全学シンポジウム2021」の記録—

本山 敬祐\*, 山本 奨\*\*, 加藤 孔子\*\*, 三浦 勇佑\*\*\*, 庄子 元\*\*\*\*, 宇佐美 公生\*\*\*\*\*  
(令和4年2月1日受理)

### 1. はじめに — 趣旨説明 —

本稿は2021年11月17日(土)に開催した「学校安全学シンポジウム2021」のうち、後半の討議の概要をまとめたものである。岩手大学教育学部は2018年度より「学校安全学シンポジウム」を毎年開催している。今年度は「安全に関する資質・能力」を主題とし、とりわけ自他の生命尊重を基盤として安全に関する資質・能力の向上に資する学校教育の役割について参加者ととも議論した。シンポジウムの趣旨説明は以下の通りである。

「第2次学校安全の推進に関する計画」では、全ての児童生徒等が安全に関する資質・能力を身に付けることが目指されている。2017年に改訂された学習指導要領が示す資質・能力の3つの柱に即して、安全に関する資質・能力は次のように示されている(文部科学省2019)。

【知識・技能】 様々な自然災害や事件・事故等の危険性、安全で安心な社会づくりの意義を理解し、安全な生活を実現するために必要な知識や技能を身につけていること。

【思考・判断・表現力等】 自らの安全の状況を適切に評価するとともに、必要な情報を収集し、安全な生活を実現するために何が必要かを考え、適切に意思決定し、行動するために必要な力を身に付けていること。

【学びに向かう力・人間性等】 安全に関する様々な課題に関心をもち、主体的に自他の安全な生活を実現しようとしたり、安全で安心な社会づくり

に貢献しようとしたりする態度を身に付けていること。

そして、安全教育は日常生活全般における安全確保のために必要な事項を実践的に理解し、自他の生命尊重を基盤として、生涯を通じて安全な生活を送る基礎を培うとともに、進んで安全な社会づくりに参加し貢献できるような資質・能力の育成を目標としている。

しかしながら、安全教育の基盤となるはずの「自他の生命尊重」が危機的な状況にある。その最たるものが子どもの自殺件数の推移である。厚生労働省及び警察庁の統計によれば、子どもの自殺件数は近年増加し続け、2020年間には過去最高を更新した。子どもが自分の命を大切にして自らの命の安全を確保するには、防災や防犯のようにハザードの回避による安全確保だけではなく、他者に助けを求めることも安全に関する資質・能力に位置づける余地があると考えられる。

安全について領域横断的に検討する前提として、安全の定義を確認する。学校安全学の親学問の一つとして位置づけうる安全(工)学では、ISO/IECガイド51による「許容不可能なリスクがないこと」という定義が広く共有されている。

図1より、安全な状態といえどもリスクはゼロにならず、絶対安全(ゼロリスク)はありえないことが導出される。自然災害がいつ発生するかは予知しきれない。また、いじめを受けている子どもが今日学校に来ているからといって、自殺のり

\* 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター, \*\* 岩手大学大学院教育学研究科, \*\*\* 石巻市立河北中学校, \*\*\*\* 岩手大学教育学部

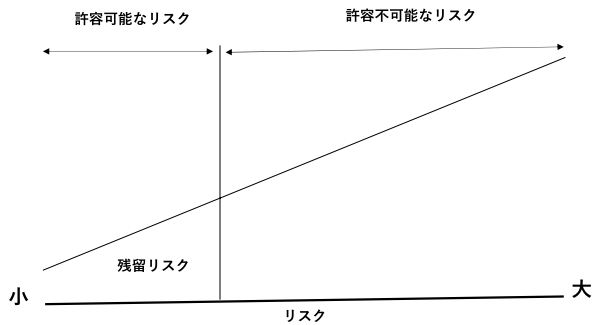


図1 リスクを通じた安全の定義

(出典) 向殿(2016)、杉原・水流(2021)をもとに作成。

リスクが全くないとは言えない。リスクを発生確率と影響の大きさの組み合わせで計算されるものだとすれば、たとえ発生確率が低くとも命に関わるリスクは可能な限り低減しなければならない。

この点について科学的な方法によってリスクを予知、予防することで主体的に安全を促進するセーフティプロモーションの考え方では、有害事象を防ぐために個人の行動の変容を求めるアプローチ(能動予防)よりも、環境を改善するアプローチ(受動予防)が重視される(反町2019)。安全に関する資質・能力を育成するには子どもに対する安全教育もさることながら、子どもをとりまく環境の整備や、人的環境の一部として周囲の大人、とりわけ教職員が子どもの抱えるリスクに対する感度を高めることが求められる。

このような観点から、以下の3名の方にシンポジストとしてご発表いただいた。

1人目は加藤孔子氏(岩手大学大学院教育学研究科(教職大学院)特命教授)である。「第3次学校安全の推進に関する計画」の策定に向けた中教審への諮問事項に「東日本大震災の教訓及び近年の災害の激甚化を踏まえた防災教育の充実」が含まれている。その議論の背景にあるのが内閣府に設置された「防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム」による提言(2021年5月)である。加藤氏は同ワーキンググループの委員を務め、釜石市の防災教育は同ワーキンググループの提言にも反映されている。加藤氏には東日本大震災における釜石小学校の経験について、安全に関する資質・能力という観点から改めて意

味づけていただいた。

2人目は山本奨氏(岩手大学大学院教育学研究科(教職大学院)教授)である。子どもの自殺対策の一環として、学校には「SOSの出し方」に関する教育の実施が求められている。ただし、SOSを発信することは、直面している危機の回避と同時に相手に自分の弱みを見せる等の一定のリスクをとる行為でもある。他者に助けを求めるか否かが個人の中でのリスク評価にもとづいて判断されるならば、援助要請には促進要因と阻害要因の両方に目を配る必要がある。山本氏には援助要請行動の阻害要因に注目して子どもの援助要請行動についてお話しいただいた。

3人目は三浦勇佑氏(石巻市立河北中学校 教諭(防災主任))である。東日本大震災にて甚大な被害を受けた石巻市には、東北地方で唯一セーフティプロモーションスクール(SPS)認証校が存在する。三浦氏にはSPSにおける組織的かつ系統的な学校安全の取組や、生徒を主体とした安全教育についてご発表いただいた。

セーフティプロモーションスクールは「第2次学校安全の推進に関する計画」において学校安全に関する先進的な取組として例示されている。7つの指標に即して共感と協働に基づき安全教育・安全管理・安全連携に包括的に取り組む学校がセーフティプロモーションスクールとして認証される。「第3次学校安全の推進に関する計画」を円滑に実施するうえでも、「第2次学校安全の推進に関する計画」に示される先進事例の成果として、セーフティプロモーションスクールの実践から学ぶべきことがあると考えた。

なお、「学校安全学シンポジウム2021」における各シンポジストの発表資料及び発表の様子は、発表者の承諾を得て一部編集したものを岩手大学教育学部のホームページに掲載している。各シンポジストの発表資料や動画資料を視聴いただいてから本稿をご覧いただきたい。

(本山 敬祐)

## 2. 討議

### (1) シンポジスト間の質疑応答

庄子：事前にコーディネーターの方で今回の討議の柱を2つ立てさせていただきました。1つ目は安全に関する資質・能力を促進する要因または阻害する要因についてです。安全に関する資質・能力について多くの場合子どもたちの資質・能力というふうを考えられがちですが、必ずしもそういうわけではなく、教員の安全に関する資質・能力というのもございますし、地域住民をはじめ学校や子どもたちに関わる広い意味での大人たちの安全に関する資質・能力ということもあろうかと思えます。

2つ目は学校安全を考える際の地域についての理解です。私の専門は人文地理学という地域をキーワードに据えている学問の一つなのですが、地域という言葉は曖昧でして空間的なスケールも実は持っていませんし、地域が何を意味するのか、どういう主体がいてどんな関係性にあるのかなど、さまざまな内容が含まれます。その地域を含めて、学校だけではなくて関係する主体と共にセーフティネットを張っていく時にどのような苦勞があり、またどのような可能性があるのかというのを柱に据えてやっていきます。

まずはシンポジストの先生方同士でコメントや質問をしていただきたいと思います。

#### 「自分の命は自分で守る」ことと自立の要求

山本：「自分の命は自分で守る」。これは防災の中ではとても重要なことだと思います。しかし、今日私の方で報告させていただいたように、子どもに自立を要求すると、子どもたちは大人のように柔軟には考えられないので「助けて」と言わないということにつながる可能性があります。自立を求めると「助けて」と言わないことになる点について、「自分の命は自分で守る」との関係で思うところをお話いただければと思います。

加藤：「自分の命は自分で守る」ということについて、今日の私の話もそうなんですが、災害発生時限定で答えたいと思います。まず、学校では

自分の命を守るための守り方を教えました。避難する場所であったり、避難方法についてであったり、地図であったり、避難訓練等で自分の命の守り方を教えました。確かにあの時、巨大地震発生後に子どもたちが避難するまでの間に援助要請行動が取れない子はいました。例えば、信号が消えて、車が渋滞しているところを渡れないで困っていた子どもが「助けて。」と言えませんでした。小学校1年生の子です。その子がどうしたかというと、その道の向こう側に地域の人がいてくれて、「今だよ。渡っておいで。」と言ってくれて助けてくれたんですね。援助要請ができない子が必ずいるわけですよね。それを救ってくれるのが地域の力であったり、家族の力であったり、周りの力だと思うのです。そういう地域の力を育てておくことが学校の役割であるんじゃないかなと思います。

それから、「自分の守りたいものは何ですか?」ということ子どもたちに考えさせておきたいと思います。それは、避難場所の方ではなく海に向かって逆行して走った子もいました。自分にとって大事なお母さんがいる家に戻ろうとしたのです。だから、「自分にとって守りたいものは何ですか?」ということ子どもたちに考えさせておきたいのです。もちろんお母さんも大事ですが、津波でんでんこのように、お母さんはお母さんで避難しているというように信じることと、その中でやっぱり自分は自分で自分の命を守ることを考えさせておきたいなと思います。

#### 学校安全における少数者への配慮

山本：三浦先生のご発表ではいろんな場面の防災学習について子たちでうまく対応できたことについてご報告をいただいています。学校安全について考えると、その中でやはりうまくいかない子たちっていうのが想定されます。例えば、防災訓練についてもサイレンの音を聞いただけでトラウマティックな反応を出される方もいます。学校安全の場面ではその少数派の方に目を向ける必要がありますし、実際は学校の中でうまく対応されて

いるケースも多いと思います。そういう意味で学習面のフォローとして、特殊な反応を出す子あるいは特に配慮が必要な子たちに対して、学校の体制としてどんなことに気をつけられたのかということをお話していただければと思います。

三浦：防災学習に戸惑う生徒に対してどのように対応しているかということですが、まず年度初めの4月の段階で全校指導をしています。その際にこれまでに体調が悪くなりそうな生徒や、嫌なことを思い出しそうな生徒を把握しています。また、配慮が必要な生徒に対しては、学習を行う前に「こういう学習をするんだけれど教室の外に出てもいいよ」と話をしております。

これは中学生限定かもしれないのですが、自分から発信できるようにということを意識しています。ただし、山本先生がおっしゃるように必ずしも自分から話ができる生徒だけではありません。指導をしても漏れは存在するというのを教員側が捉えておく必要があると思っています。年度初めの職員会議の場でも、新たに赴任してきた先生方とこのような話は必ずしています。

### 防災教育の継続とSPS認証の関係

加藤：防災教育をはじめ様々な実践が積み重ねられていますが、教師集団は異動で大幅に人が替わります。東日本大震災から10年経っても当時のことを知っている教員がいないという状態も出てきているわけですね。10年経つ間にその防災教育の取組が形骸化したり、教師集団の熱量の違いもあったりすることがあるなかで、防災教育を継続させる上でこの認証制度に何かメリットがありそうな気がするのですが、そのあたりを詳しくお話していただければと思います。

三浦：2点挙げられるかなと思います。1点目はセーフティプロモーションスクールの取り組みに関してです。セーフティプロモーションスクールは7つの指標に基づいて実践を積み重ねるものです。その指標に基づいて実践を重ねることが、風化させないために重要なことだと思っています。指標に基づいてPDCAサイクルを回し

ていくことが大事だと思っています。

2点目ですが、本日発表させていただいた資料も実は先輩の先生から受け継いできた資料です。そういった資料を先輩から受け継いでいます。ですので、教員間での受け継ぎや引き継ぎが大事なことだと思っています。また、引継ぎが柔軟にできる同僚性も大事なことだと感じております。次年度の取組を見越した引き継ぎがなされると、教職員集団もうまくできて出来上がっていくのではないかなと感じております。

### 周囲からの評価が阻害要因となりうるか

三浦：山本先生の資料の中では生徒対教師というところだったのですが、私の経験からしますと、「ちょっと今のってどういうこと」と最初は生徒同士で質問していたり、質問する際に本当に自分の今の疑問がみんなのためになっているかどうかというのを教師に話をするときの阻害要因になっているように感じています。例えば、防災学習を始める前に「体調が悪くなりそうな子は来てね」と言ってもなかなか言い出せないのは、周りの生徒との関係が影響している気がしますが、そういったところについていかがお考えでしょうか。

山本：生徒が先生に話すときに、周りからどういふ評価を受けるか気になるというのは当然あると思います。例えば授業中で質問したくても、公共性のある質問とはどういうことなんだろう、自分の興味だけで質問して良いのかと当然気になります。それは自分のことをモニターするときに普通は思い浮かぶことなので、それは当然の反応です。そのときに、学校の先生としては環境整備ができていないところで質問させていないかを考える必要があります。みんなの前で話させることができる子どもやできる子ども、ふさわしい内容とそうではない内容とを先生がコントロールしなければならぬと思われれます。

### (2) 参加者からの質問を踏まえた討議 釜石小学校での防災教育について

参加者：学年によってどのように異なった防災

教育をしていたのか。安全マップ作りにかかる時間や、避難訓練でどのように活用されているのか。

加藤：まず学年ごとの防災教育についてです。『釜石市の津波防災教育のための手引き』というのがあります。これは釜石市教委のホームページからダウンロードできますので後でご覧ください。各学年のそれぞれの段階に応じた指導内容はここに書いてございます。

これに従って行っていたことが1つです。それから安全マップ作りは学校の中ではそんなに時間をかけていません。というのは、年度始めに子どもたちが自分の家から学校までの通学路の中で避難場所を見つけたり、ここの建物は大きな揺れが起こった時に倒れてきそうで危ないとか、そういうことを地図に書き込んでいくマイマップをそれぞれ作るんですね。低学年は親子で、親も一緒に歩きます。子どもたちはその地図を作って、最後はグループで話し合いをしながら大きな地図にまとめていくのですが、高学年の総合の時間を使って行いました。それを学校内に貼っておくと、子どもたちはそれを自然に頭に入れているので、避難訓練ではそれを持っていなくても、頭の中でここからはここの避難場所が近いというところを自分で判断して避難をしたということになります。

#### 生徒主体の避難訓練で出てきた反省点

参加者：河北中学校では部活動中に生徒のみで避難訓練を実施したということだが、生徒からはどのような反省点があげられたか。

三浦：生徒主体の避難訓練ということで、部活動中の避難訓練を行いました。その時に出了た反省として、例えば剣道部は屋内で活動を行っていますので、ダンゴムシのポーズをとってしまうと、上から物が落ちてきた時や何かが移動してきた時に身も守れないのではないか、あるいは、周りの状況が把握できないんじゃないかという話がなされました。「ダンゴムシのポーズを改良していかなければならないね」という反省も出されました。実際に周りの状況を把握するというのは、その後の避難訓練でも確認されたところでした。

#### 教職が子どものSOSを聞くために

参加者：生徒がSOSを出せるというスキルの向上と同時に、教職が生徒は相談したくないというような気持ちをしっかりと理解するという部分の重要性を指摘されていたと思う。教職がしっかりと聞き取るというような部分で、教職のスキルアップのためにどういった方策が必要で、どういう対応が考えられるか。

山本：私が今一番興味深いのは、やはりこの段階でスキルアップという方向に向かわれるのだなという点です。子どもが話してくるときにどのように聞くのかは、技術の話ではなくて、誰にとって利益のある話を聞こうとしているかという問題だと思います。学校の先生が興味のあることを聞こうとすれば、例えば「相談の内容」ということになるのだと思います。しかし、子どもが話したいのは、「いや先生話したくないです」という方の話です。これは話をしたくないのではなく、「先生には話したくないです」という話を既に始めているわけです。子どもが話したいのはそちら側なのです。つまり、「先生に言ったらどんなことになっちゃうんだろうね」と言いながらその話を聞くところなのです。技術というのはこちらがいろいろな技を使って子どもの中に手をつっこむようなイメージです。そうではなく、こちらの態度の問題と理解した方がいいのだと思います。それでも態度というと今日せっかくご参加いただいた方が学びにくくなると思いますので、「人間は普通に複数の本心を持っているのだ」と理解してもらうことではいかがでしょうか。本人は「困っているけれども言いたくもない」という感じです。片方だけが本心だとか、望ましいことだけが本心だと考えると聞き逃すのだと思うのです。子どもたちも「解決はしたいのだけれども、でも話したくないな」と思っていて、それが6対4とか4対6の中で行き交いしているのだということを先生方が理解をすれば、スキルではなくて態度が少し柔らかくなるのではないかなと思います。

### 子どもの命を守るセーフティネットの構築

庄子：続いて2本目の柱に入っていきたいと思います。必ずしもその生徒からのSOSを教員一人が、具体的にはその担任一人が聞き取るというのは困難な場面もあろうかと思えます。そうした中では個人ではなく組織としてどのように対応していくのかというのも重要なところになってくると思えます。当然それは学校内だけの組織ではなく、ご家庭が入る場合もあるでしょうし、そこには地域の他の主体も入ることがあると思えます。子どものSOSを聞き取るための組織作りについてどのように進めていくのか、その可能性はどういったところにあるのかという点についてまた山本先生にお伺いできればと思います。

山本：例えば生徒から死にたい気持ちがあるんだってという話が出てきたときに、まず大事にしなければいけないのは、先生が「今、選ばれた」ということ。先生がせっかく選ばれているのに、これは自分では聞き取れないから他の人につなげようっていうのでは全然連携にならないのです。

その時に本当に具体的なところなんですけれども、例えば背景に精神疾患があるのではないかとの疑いがあるとき、「精神科の診断が必要だから医療につなごう」というように「〇〇だから」というところをはっきりさせる必要があると思えます。ただやみくもにたくさんの人たちで関わればいわけではなくて、「このケースの場合には福祉の観点が必要だから」というように、目的を明らかにするのが一つです。

もうひとつです。先ほど「選ばれた」と話しました。選ばれているのにその話を「ドクターに聞いてもらいましょう」となれば、その子は見捨てられたっていう感じがするので、極めて危険です。「ドクターにも聞いてもらいます」と、「も」を加えることが大切です。「私もこれからも聞き続けますからドクターの目も用いることにしましょう」という表現で機能を確認して増やしていく。この2点がコツだと思います。

### 地域との合同避難訓練と「もしも」のデザイン

庄子：しっかりと関係性はキープしながらも互いの関わる人間の専門性という点でもむしろ連携のネットワークを増やしていく。その点でセーフティネットの網目を細かくしていくというか強固にするというようなご回答だったと思いますが、少し違う点から近いところもあるんですけどもおそらく岩手県の内陸地区の中学校に勤めていらっしゃる先生からのご質問が来ております。その方の学校では震災前に地域で消防との合同訓練を実施していたらしいんですけども、震災当日にそれぞれが合同で動くということがなくて訓練が現実的ではなかったということが浮き彫りになってしまったとのこと。訓練後の指導者側の振り返りというようなことで、おそらくこれは加藤先生にお答えいただくのがいいのかなというふうに思っているんですけども、避難訓練の時にどういったような振り返りをされているのかというような点を是非をお教えいただければなというふうに思います。

加藤：まずこの訓練の目的、それからそのためのそれぞれの詳細な動き等がこれはもしかしたら計画の段階からしっかりしていなかったのではないかなって思うんです。訓練の目的と計画がしっかりしていて、そして実行してこそPDCAになりますけれども、それに沿った振り返りになるのだと思いますがそれでよろしいでしょうか。

庄子：今の避難訓練の部分は三浦先生にも共通する内容かとは思いますが、不測の事態を避難訓練の時からデザインしていく、「もしも」をデザインするというような部分があるかと思うんですが、具体的に避難訓練の計画段階でその「もしも」を含めてどのような細かさでデザインされていたのかというのも、おそらく参加の先生方の参考になると思えます。応えられる範囲でお答えいただければと思います。加藤先生いかがでしょうか。

加藤：通常の訓練で本当に今の子どもたちの実態でいいのかどうかっていうことを私は考えたわけ。通常の訓練というのは、学校にいる時の

地震発生を想定した避難訓練です。大津波が来た時に学校にいる場合はいいんだけど、子どもたちが家から学校に登校するときや下校の時、また、外で遊んでいて公園などに一人にいるときにどうなんだろうと考えたことがあの下校時津波避難訓練を考えるきっかけになったわけです。やはり、「まさかこんな時に」、「まさかこんなところで」という想定される「まさか」を考えてみるのだと思います。

三浦：河北中学校でも避難訓練の指導者の振り返りを毎回丁寧に行うのはなかなか難しいと感じています。だからこそ先ほどもお話しましたが、やはり教職員の同僚性がとても大事なところだと感じています。「実際だったらありえないよね」という話が避難訓練後に聞かれることがあるので、そういったことを拾い上げていくのが大事だと思います。あとは加藤先生のおっしゃるとおり、実際を想定して考えられる「まさか」というのは大事な点だと思っていて、本校では役割分担を明示しないというのをポイントにしています。その理由は、災害が起こるときは本当に「まさか」の状態なので、役割分担が明記されているのはおかしいだろうという話が出ています。その反省から役割分担を明記しない避難訓練がなされるようになったので、反省の時に出了意見の一つ一つ丁寧に拾い上げることが大事だと思っています。

山本：私は別の視点から述べます。この「合同訓練を実施したにもかかわらず」ということですが、「かわからず」よりも合同訓練をしたことが重要だと思います。合同訓練をしたときに、「学校には何ができるのか」という機能をお互いに確認をして明らかにしたのだと思います。明らかにすると、例えば学校にとっては何ができて何ができないのかということがはっきりします。実際の被災の時にもし合同でできなかったとしても、不足は補えたのだと思います。その意味で、もしかしたらすでに合同の必要はなくなっていたのかもしれない。そう感じています。

### 地域との関係の築き方

庄子：おそらく学校が立たなければいけないのは、学校で全ての子どもを命を守るのではなくて、学校で守れない子どももいるかもしれないという部分に目を向けた上で、ご家庭であったり地域、行政であったりとすべての子どもを守るためにネットワークを張っていく、できる限り零れ落ちないようにしていくというような姿勢が大事になってくると思います。

少し視点は変わりますが、地域性について具体的におうかがいしたいと思います。おそらく石巻と釜石も同じ沿岸部ではありますけれども違いますし、どういったような地域性の学校でどういった主体がメインとなって学校と連携していったのかという点、さらには連携が難しかったというような困難について何かありましたら話していただけると助かります。

加藤：釜石小学校に着任した時に、震災に関係なく、学校に地域の教育力を入れたいと思ったんです。というのは、前任校が内陸にあり、結構若い世代がたくさんいる地域だったので、若い力を学校に借りていました。それで釜石小に行きました時に若い力があんまりない地域だったんです。それでも何かしら学校に携わってもらえる力はないかと探したものが、例えば読み聞かせボランティアだったり、スクールガードや放課後学習の丸付けをしてもらっただけでも何でもいいからボランティアを募集してみたところ、ちょっと年齢層は高くても学校に関わってくれる人たちがいたということなんですね。子どもたちと地域の人がある中で触れ合うことで、地域の方に子どもたちの顔を覚えてもらっている。逆に子どもたちも、その地域の方の顔を覚えている。東日本大震災で子どもたちの命を救ってくれたのも地域の人たちの声かけがあったり、普段から地域の人と子どもたちとのつながりがあったからだと思います。

また、防災に関しても理解をってもらうように地域会議等で、地域の方に学校から説明をしたり、共有したりっていうところを努力したところなんです。そういうことで地域の力というのは普段か

らの挨拶をすることから始まって、それが震災時に子どもを守ってくれる力になるんだと思います。あとは援助要請ではないんですけど、例えば、「今日、あの子どもが泣いて帰ったっけよ。」とか、そういう小さな情報も地域の人とつながっていれば大変役立つ情報になります。

三浦：私は連携の難しさの方でお話をしたいと思います。発表資料の中にありました地域防災連絡会というところなのですけども、基本的には各中学校区の中学校で主催しています。ただし、話の内容というのは、例えば、「地域に住んでいる子どもたちは何人ぐらいいるのか」ということや、「どこに逃げればいいのかのだろう」というものです。そういったことは、どちらかというと行政の方の取り組みなのではと感じています。地域防災連絡会にも行政の方がいらっしゃるのですが、例えば、河北中学校は今年体育館が改装工事になっています。そのときに災害が発生した場合にどこに逃げればいいのかというのを質問されたときにも、今すぐには回答が難しいというときがありました。ですので、そういったときにどう助けを求められるか迷ったところでした。

そういったときに地域と繋げていただくことに関しては、宮城県では今年から学校防災アドバイザー事業が始まり、県庁に相談窓口があります。その相談窓口にはアドバイスをいただいて、どこも協力していけばいいか、どういうふうに取り組んでいけばいいかということについてヘルプが出せるようになりました。ですので、地域と関係を築いていく際にもそういったところに相談が可能になると思います。

### 援助要請行動を阻む関係性

庄子：地域と学校の連携には地域のさまざまな期待があるわけですけども、その連携の重要性をお話いただきました。それは援助要請行動でも同じことが言えるとは思いますが、援助要請行動の場合は特に学校が結びつくべき主体がどういうところにあるのか、また、少し難しい点になるんですけども、こういった関係を作っ

てしまうとむしろ援助要請行動としてはマイナスの関係に働いてしまうんじゃないかというような、ネットワークが阻害するような部分がありましたら山本先生にお聞きしたいんですけどもいかがでしょうか。

山本：例えば自殺したいといって子どもが行方不明になることがあったりします。大人はものすごく慌てるのですが、学校でできることは本当に限られているのです。できないことを頑張るっていうのは、無責任なことだと思います。その時、地域というものを具体的に想定する必要があり、何よりも探すっていう機能では警察以上の資源はない。警察の探すという機能の上で発見できたときに、次は保健所特に保健師さんがその子の状態について見立てを行ってくれるというところで資源になります。そして、その見立てのもとで病院に行って入院で保護をする必要があるのかということについては医療で見てくれるということになります。それから入院の必要がないとなれば、地域の中に入院以外の機能として保護者を活用する。このときに学校は全体についてコーディネートをしたり、保護者に専門機関に関する情報を提供することができる。こうやって地域とは何かということを具体的に、この機関、この人、この役割というところまで絞り込んでいかないと連携というのは成り立たないと思います。

逆に連携を一番崩すのは、「何でもやります、頑張ります」ということなのだと思います。職能アイデンティティをそれぞれがはっきりさせて、誰が何をできるのか、何をしなければならないのか、何をしてはいけないのかということを確認すると連携ができる。「何でもやります」という人たちがたくさん集まったとしてもそれは連携とは言わないという感じがしています。

### SPSの波及効果

参加者：河北中学校でやられている取組が非常に豊富で、しかも計画的である。そうした取組が石巻市内の他の学校や宮城県内の他の市町村にまで波及していることがあれば、その際にSPS認



証が関わっていたら、認証がもつ効果も併せてお話しいただきたい。

三浦：SPS 認証と絡めてというところですが、SPS 認証を受ける際に学校の中でも認証に向けて頑張ろうという気持ちが作られ、いろんな取組がなされるようになりました。いろんな委員会ができて活動が増えたことで、石巻市の防災主任研修会で本校の取組を発信できるようになりました。先ほどお話しした役割を明記しない避難訓練は、市内の学校では主流になっていると思います。あとは河北中学校区の取組ではないのですが、学校防災アドバイザー事業の中で県が「学校防災だより」を発行しています。その中でもいろいろな取組が発表されています。それらを確認する場があるというのはとても良いと思っております。さらに、石巻市でも独自に作っている防災副読本等もあります。副読本の中にも市として取り組んでいきたいと思いますということが書かれています。

### (3) まとめ

子どもたちに育みたい安全に関する資質・能力及び子どもを取り巻く大人に必要なこと

加藤：災害伝承と新たな防災教育ということをお伝えしたいと思います。釜石市にあります津波伝承館のいのちをつなぐ未来館には、「てんでんこレンジャー」の顔出しパネルがあります。これは観光地の顔出しパネルと違っていて、未来館を一巡して学習したら、自分の地域に起こりうる災害の身を守る方法や教えをここで考えようというふうに設置したものです。今日は私の方からこれからの防災教育新時代を担う学生の皆さんや学校の先生方へ私からの教えを3つお話ししたいと思います。

1つ目です。自分の命は自分で守る。防災教育をいろいろやっていると、「助けられる人から助ける人へ」というのもいろいろ言われていますけれども、まず「自分で自分の命を守る」ということが最優先だと思っています。

2つ目は、Only one の防災教育をということですが。例えば今日の河北中学校さんの発表を聞いて、他の学校がこの先進的な事例をもとにそれを真似

ることはいいことですが、全てコピー・アンド・ペーストではあってはならないと思います。それぞれの学校の地域の実情実態をしっかりと目で見て確かめて、その学校ならではの防災教育を考えてほしいと思います。

3つ目は、One team を創ることです。釜石小学校では、子どもたち、保護者、それから先生方、地域の方々、行政と、5者が震災前から仲良しだったんですね。そういう One team を創っておくと、防災教育だけではなくて援助要請行動もできていくのではないかなと思っています。

先ほどの話の中で思い出したのは、釜石小学校の場合は何でも頑張りますとって地域の方が来てくださったのではなくて、「ぺっこすけっから」ってわかりますか？この方言。「ぺっこすけっから」というのは「少し助けるから」という意味で、地域の人たちがそういうグループを作って学校教育に力を貸してくださったことを思い出しました。

山本：私の方からは、「子どもたちに教えることだけではなくて、子どもたちの困り感に対応しましょう」ですとか、あるいは「子どもたちのことにもう少し真正面から耳を傾けましょう」という話をしました。今日お二人の先生と一緒にさせていただいて良かったなと思っています。そこで考えさせられたのは、「学校の先生の職能アイデンティティとは何だろう」ということです。そして他の機関ではできないことはやはり「教えること」なのだと思いました。それは他の機関ではできない。

教えることというのは、一面的な教え込みではなく、「集団の指導」と「個別の支援」を必ず組み合わされているのだと思います。普段の授業でもそうですし今回のような内容でもそうなのだと思います。全体を指導したら必ず個別の視点を入れているのだと思います。そのように考えると、集団の指導とそれから個別支援をうまく組み合わせて指導援助するという職能の特徴を地域の機関ときちんと連携させることができれば良いと思います。今日はありがとうございました。

三浦：本日のお話の中で、やはり本校としてはセーフティプロモーションスクールの認証を受けた上でこういった話し合いにも参加させていただくのがとても有益だと思いました。本校では主体性を育てる防災学習を常に考えております。これはやはり防災学習ありきではなくて、あくまでも生徒の主体性を育てるところが一番になると思っております。本校の校長も毎回のように職員会議の中では主体性という言葉を使っております。そういった一つ何か貫く理念があることで、学習が成り立っていると思います。防災学習にしても何にしても、他人事ではなく自分事として捉えるということを学習の中でもしっかり身につけさせていかなければならないなというふうに感じておりました。

教えることを常に自分の本分と自覚し、先ほどの山本先生のお話のように考えていきたいと思えます。また、これまでの先輩方の実践があってこそその本校の実践です。これからも地道な指導をしっかりと行うことによって、子どもたちに主体的に自分の身を守る姿勢を身につけさせていきたいと思えました。

#### コーディネーターから

庄子：私は人文地理学を専門にしている人間なので、地域内でどういう生活がありどういう人がその地域を作っているのかというような点で研究をしています。地域はそこにあるものではなくて、地域はそこに住んでいる人たちが作り上げていくものでして、そこには教育も入ってきますし文化も入ってきます。そうした点で改めて地域を細かく捉えて、子どもたちを守る上でもそういうネットワークをどう張っていくのかというのが特に地域の力といいますか、社会的な紐帯も弱まっている今だからこそ主体的にむしろ作っていくかなければいけないんだなというふうなことを勉強させていただきました。

学校の先生が非常ご多忙なのは実体験として理解しております。そうした中で大学がどのように関わっていくのか、傍観者ではなくて大学もその

ネットワークの中にどのように入ってむしろ現場の先生方をサポートしていけるのかというところもまた我々大学に関わっている人間の課題でもあるのかなというふうにも感じました。

本山：本日は子どもの命を守り安全に関する資質・能力という観点から防災教育と自殺対策のつながりや関係性を考える機会になったと感じています。そして、過度に自立を要求することが命を守るための援助要請を阻害するという知見は、近代学校教育が当然としてきた個人の自立という前提自体を問い直すという側面もあり、学校安全学の構築を目指す本学部のシンポジウムとしてこのテーマを設定した意義があったと感じています。

冒頭の趣旨説明におきまして、安全について広く受け入れられている定義として「許容できないリスクがないこと」が安全だというお話をしました。私たちは様々な制約の中で安全をより確かなものに近づけることしかできません。子どもの命を守る安全な学校づくりについて考えていくにあたって、学校が万能ではない、学校には限界があるということを学校の中からも自問する余地はあるのではないかと思います。また、地域の側が学校に限界があることを理解して、子どもを守るセーフティネットをどのように構築していくべきか学校と一緒に考えていく必要があるとも思います。このようななか、学校における理に適った安全管理や安全教育として、セーフティプロモーションスクールの指標や実践が重要だと思います。

今年もオンラインでの開催となりましたが、大学として様々な方と学校安全について考える場を設け続けるというのも広い意味でいうセーフティプロモーションの一環と指定位置づくと考えています。実は昨年度の学校安全学シンポジウムからのご縁がつながって本日の三浦先生にご登壇いただきました。今後も石巻市におけるセーフティプロモーションスクールの実践に学ばせていただきたいと思います。また、本日ご参加いただいた皆様とも一緒に学校安全について考え続けて、新しい価値を一緒に生み出していきたいと考えています。本日はありがとうございました。

### 3. おわりに — 閉会の挨拶 —

本日は週末の貴重なお時間を割いて多くの皆様に岩手大学学校安全シンポジウム2021にご参加いただき、心より感謝申し上げます。シンポジストの岩手大学大学院教育学研究科の加藤孔子先生また同じく山本奨先生、そして石巻市立河北中学校の三浦勇佑先生にはそれぞれのご経験をふまえての貴重なご発表を賜り、さらにそれぞれのご専門の立場からいろいろな質問にお応えいただき、ご意見を交わしてください心より御礼申し上げます。

「奇跡ではない軌跡」と語られた加藤先生やSPS認証の取り組みを語られた三浦先生のお話にもあったように、学校は様々なことを総合的に学ぶ場であり、理科や社会、道徳、総合的な学習等それぞれの教科等の中での学習が有機的に結びつくことで、本当の意味での危険を察知し自らや周囲の人達の命を守り生きる力を育む場であることを改めて認識した次第です。また、三浦先生や加藤先生のお話からも、改めて日頃からの実践的訓練の重要性も再認識いたしました。

学習で得られる原則や原理の知識ではなく、それを現場で活用する判断力というのは、個別具体的な事例での様々な練習や豊かな実践によってはじめて身につくものであり、一度きりの学習で習得されるものではないことを改めて学ばせていただいた次第です。

理論と実践の往還とはよく言われますが、理論と実践の間に一人一人が考える機会、修正する機会、状況に応じて適切に判断したり討議する機会、そういうことを持つことの重要性を学び、今日資質・能力といわれるものが古代ギリシャの哲学者アリストテレスが語っていたアレテー、つまり徳を磨くことに通ずる部分があることに気づかせていただきました。単なるマニュアル的な繰り返しでもダメで、また行き当たりばったりの経験の数だけでもダメで、お手本や原則や原理を踏まえつつ、例えば不審者マップを応用した安全マップづくりのように、具体的な現場での学習経験を通して原則を吟味修正しながら応用する力、判断力を

磨いていくための工夫、それは教師の授業力にも関わっているわけですが、それらがいかに重要であるかを学ばせていただきました。

山本先生のご発表からは、震災に絡んで要支援者が一定数相変わらずいること、そして児童生徒が信頼し気軽に相談できる周囲の人間とりわけ教師側の日常の在り方の重要さも学ばせていただくとともに、我が身を振り返りいろいろと反省させられる部分もございました。児童生徒がそれぞれに抱えている価値観、他者への気遣いや遠慮、不安、本人の自尊心など繊細な心理の陰影を十分には分からないにしても、それらを抱えた子どもを受け入れる教師側の姿勢の難しさを改めて痛感した次第です。

私自身は新自由主義的な社会においては医療における自己決定権や自律尊重という考え方が弱者や終末期の方たちの生き方の幅(ケイパビリティ)を狭め、死ぬ権利や安楽死を求める声につながりかねないという生命倫理的な問題をこれまで考えてきました。山本先生のお話を伺い、自己決定や自立は大事だが、それをあまり厳しく迫らない社会、共に生きることに開かれた社会、相談したくないと思ってしまう心の意味を改めて聞き取れる環境を整備すること、の重要性を考えさせられました。

三浦先生からは河北中学校での防災教育や交通安全教育、感染症対策などの安全教育のバリエーションの豊かさ、さまざまな教科での学習をつなげることの意義や、教職員の間での相互のチェック体制とその改善の試み、地域とのつながりの重要性などさまざまなことを学ばせていただきました。また、皆様の活発なご質問からもより具体的な課題対応について学ばせていただきました。

安全のためにさまざまな技術が我々の周りに配慮されていますが、その技術が時に生命を脅かすこともあります。最初に副センター長の本山先生が話してくれたように絶対安全はあり得ないということを前提しつつ、しかし社会や学校システムとしてまずはシステムとしてのリスクを最低限に減らす必要があります。その上で残余のリスクに

適切な対応ができる児童生徒を教育し資質・能力を身に付けてもらう教育のあり方の工夫の必要を改めて考えさせられました。

人類の社会は一方で科学技術を通して人々がリスクに遭遇する危険性を回避する方法を開発してきたわけですが、それによってかつての人類が自然に有していた能力がスポイルされてしまうかもしれない、それが心理的な正常化バイアスを促進しているかもしれない面もあることを考えつつ、その一方でまさかのリスクに対応できる資質・能力の育成を考えていかななくてはならないというある種ジレンマ的な面というのを意識しながら、今後も学校安全がどうあるべきかということについて研究してまいりたいと思った次第です。

本日はお休みにも拘わらずたくさんの皆様にご参加いただき誠にありがとうございました。また、ご後援をいただきました岩手県教育委員会、日本安全教育学会、日本セーフティプロモーションスクール協議会の皆様にも改めて御礼申し上げます。

(宇佐美 公生)

### 引用文献

杉原健治・水流聡子 (2021) 「アフターコロナ時代の子どもたちへ——リスクベースで考える安全安心社会への転換を目指して」『教育と医学』第69巻第2号、慶応義塾大学出版会、30-38頁。

反町吉秀 (2019) 「セーフティプロモーションとは？その歴史と基本的な考え方」日本セーフティプロモーション学会編『セーフティプロモーション 安全・安心を創る科学と実践』晃洋書房、17-27頁。

向殿政男 (2016) 『入門テキスト 安全学』東洋経済新報社。

文部科学省 (2019) 『学校安全資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』東京書籍株式会社。